OISCA

—人と育む、地球といきる—

〔TOPIC〕

数字で見る！

オイスカ訪日研修生・技能実習生

JULY 2026 | 7

今月の

OB＆OG

日本で学んだオイスカ研修生の今を紹介します。

FILE No. 10

アルバート・ヤシン（61）

愛称：アルバート

▮出身国　マレーシア
▮研修歴　中部日本研修センター／
農業一般コース（1983年1月〜84年3月）
▮現在の職業　村の発展・治安委員会委員長

早朝のラジオ体操。入所当時は岡崎市にセンターがありました

勤勉さとやり遂げる精神を学びました

今から43年前、17歳だった私は1983年1月19日に初めて日本の地を踏みました。当時岡崎市にあった中部日本研修センターで３ヵ月間日本語を学び、その後西尾市に移転したセンターで近代農業の研修を修了しました。また岩手、福島、神奈川、静岡、愛知などでホームステイも体験。各地で農業や養鶏を勉強しながら、日本の生活や文化に直接触れることができました。そうした日本での日々を通して、規則正しい生活やお互いを尊重し合う姿勢、清潔を保つことの大切さを学びました。身の回りや自身を清らかに保つことは、その人の本当の内面を映し出す鏡となります。さらに、困難を改善の機会として捉えることが重要であり、難しい仕事でも、それを乗り越えた時にこそ日ごろの勤勉さが本当の価値を持つのだと知りました。

帰国後は、オイスカの研修生の仲間と一緒に１ヵ月間稲作農場で働き、その後会社員や養豚経営、日本語のツアーガイドなどを経験。ガイドの仕事は最も好きなキャリアで、2015年まで約13年間勤めました。現在は、村の発展・治安委員会の委員長として、平和で調和の取れた地域社会づくりに力を入れるとともに、PBPOS（ピービーポス）（サバ州のオイスカOB・OG会）のメンバーとしてオイスカ活動を支援しています。これからも、どんな活動も最後までやり遂げ、前進し続けたいと考えています。

PBPOSのメンバーとして、5月に日本を再訪。お世話になった方々へ感謝を伝えることができました

創立者のことばを紐解く

日月星辰

公益財団法人オイスカ　理事長　中野悦子

農業の大教育

「日本では太古より、農業をもって国家経綸の基本として伝えられてきたことを提言しておくとともに、その農業が、単なる農耕技術にとどまらず、国民の大教育として継承されてきたことを特に強調しておきたい。言い換えれば、国民の教育として農業が伝えられ、その精神によって継承された日本であることを申し上げたい。

農業が教育である理由を述べるならば、宇宙大自然によって造化された天体が、太陽・太陰・地球の運行として定まり、続いて萬物が発生し、やがて人類の誕生となったものであるが、その人類が体験した地球の現象の始まりは、春夏秋冬という循環順律であり、その中で行われた生命維持の道が農業として開けてきたものである。

ここには全くの偽りがなく、大自然の教えのままに、初夏の気候が麦を稔らせ、秋の気候が黄金の稲を稔らせてくれる。山林業においても同様で、青葉とともに初鰹を食膳に供してくれ、秋風とともに鯖に美味を加えてくれる水産業ともなるのである。ここに、四季の循環が農業の収穫を与えているとともに、自然に、その国土を重んじ、国家を愛する国民の精神をも育てていることを忘れてはならない。特にあざやかな景観とともに、四季が歴然としているわが国に於いてはいうまでもない。日本人独特の精神界を育てているばかりでなく、日本という国土に育った作物は、日本の大地になじんで稔り、日本人の血を作る働きをしているのである」(創立者のことば)

住んでいる地で季節毎に生産された農産物をいただくことが、私たちの健康にとって一番大事なことです。何故なら私たちの身体もその土地の気候に呼応した働きをしているからです。夏は水分が多い野菜、冬には身体が温まる物をいただく。それが身体が喜ぶことであり、精神も安定する。そこに村祭りの起源があると思います。

OISCA JULY 2026 7 Contents

04　OISCA NEWS　海外／国内

06　オイスカ便り　三重推進協議会

08　TOPIC　数字で見る！ オイスカ訪日研修生・技能実習生

10　今月のこの人　中部日本研修センター　研修第二課　松岡篤彦

12　OISCA SQUARE　オイスカ歴史さんぽ／OISCAレストラン／お！ススメOISCA

14　INFORMATION　新着情報 ほか

What's OISCA

オイスカ・インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立された国際協力NGOです。現在、41の国と地域にネットワークを持ち活動しています。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では、農林業体験やセミナー開催などを通して啓発活動を積極的に進めています。

OISCAという名称の意味

O rganization　機構
I ndustrial　産業
S piritual　精神
C ultural　文化
A dvancement　促進

人間の生存に不可欠な“産業・精神・文化”のバランスを大事にした発展を世界規模で推進していくことを目的として、このように名付けられました。

国内 「子供の森」計画

インドネシアから高校生ら15名が来日 同世代との交流で日本の森と林業を学ぶ

5月8～15日、(公社)国土緑化推進機構との共催で「日本―インドネシア　緑の青年国際交流事業」※を実施。インドネシアで「子供の森」計画に参加する高校生、教員ら15名が愛知県と長野県を訪れ、日本の森林・林業や森林教育について体験的に学びました。

一行は、長野県木曽青峰高校や長野県林業大学校で、互いの活動紹介や演習林での学習、授業体験などを通じて交流を深めたほか、森の健康診断ワークショップや森林組合の林業現場見学にも参加。計画的な森林管理について学びました。さらに、赤沢自然休養林の散策やダムの視察では、森林が水資源や地域の暮らしを支えていることを実感。当初、参加者たちは伐採に否定的な印象を持っていましたが、間伐などの適切な管理によって森林が健全に保たれることへの理解を深めました。

参加者からは「日本の学生たちと一緒に学んだことは忘れられない経験。理論だけでなく、木を大切にする心や森への敬意を実感できた」「自然を守っていこうという決意が生まれた」といった感想が聞かれました。同世代との交流を通じて、互いの文化や価値観を理解し合う機会となり、帰国後の活動への意欲も高まったようです。大きな学びと刺激を受けた参加者たちの今後の活躍が期待されます。

※この事業は国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」を活用して実施しました。

長野県林業大学校での活動報告

木曽青峰高校での演習林散策。同校は、過去にインドネシアでオイスカ活動に参加した経緯があり、訪問先に選ばれた

海外 海外開発協力事業

現地銀行からタイのプロジェクトに寄附 8月の植林イベントの準備も進む

3月12日、オイスカが進める「タイ王国チェンライ県緑化再生およびコミュニティ開発プロジェクト」※に対し、タイのアユタヤ銀行より100万バーツ（約500万円）の寄附が寄せられました。アユタヤ銀行は、タイ大手銀行の一つで、現在は三菱UFJフィナンシャル・グループのグループ企業として、日本とも関わりのある銀行です。

今回の支援は、駐日タイ王国大使館とウィッチュ・ウェチャーチーワ同大使らの働きかけによって実現したものです。また、同大使館には昨年プロジェクトへ寄附いただいたほか、タイ王国外務省やアユタヤ銀行など現地企業への積極的な支援協力の呼びかけにも協力いただいています。

寄附金は、8月に予定している現地の住民と行う植林イベントなど、プロジェクトにおける今年度の活動資金として活用されます。

※このプロジェクトは来年の日タイ修好140周年の記念行事の一環として実施されるものです。

昨年8月27・28日には、日本からのボランティアも参加し、プロジェクト地で6,000本を超える植林が行われた

海外 マレーシア／マラ公団創立60周年記念式典

副首相から感謝のトロフィーが贈られる さらなる発展に向け歩みを止めず

5月3日、クアラルンプール世界貿易センターで、マラ公団創立60周年記念式典が開催されました。オイスカは、1967年からマラ公団と連携し、主に工業分野の人材育成事業を展開。これまで1100人以上の研修生、技能実習生を受け入れてきました。

当日は、公団の主管官庁である地方地域開発省、公団関係者、提携団体、企業の代表ら約1300名が出席。日本からはオイスカ・インターナショナルの永石安明副総裁と、公団の技能実習生を受け入れている愛知ダイハツの坪内孝暁代表取締役社長ほか2名が参加しました。式典では、公団と共にマレーシアの発展に貢献した団体への表彰が行われ、オイスカには持続可能な地球社会に寄与したとしてアハマド・ザヒド・ハミディ副首相からトロフィーが贈られました。

また永石副総裁は今回の渡航で、公団傘下のクアラルンプール大学の副学長およびケダ州農業開発公社（MADA）理事長と今後の連携協議について意見交換しました。

ザヒド副首相よりトロフィーを受け取る永石副総裁（右から3人目）。副首相は、地方地域開発省大臣とオイスカ・マレーシア総局会長も兼務している

海外 ウズベキスタン

エコエキスポでアラル海の活動を紹介 林業庁との連携に関するMOUに署名

6月2～4日、ウズベキスタンのサマルカンドで、同国生態・気候変動委員会※主催の中央アジアエコエキスポが開催されました。オイスカはそのサイドイベントとして、JICAと共催でアラル海の沙漠緑化や住民の生計向上に向けた取り組みを紹介するセミナーを実施。当日は、冨樫智専門家が日本からオンラインで参加し、アラル海の沙漠化の現状を伝えるとともに、オイスカが地元の林業局などと協力しながら進めるサクサウールの植林について説明しました。

エキスポの開催に合わせ、オイスカ・インターナショナルの永石安明副総裁が現地入りし、関係省庁で意見交換しました。林業庁では、エルキン・ムヒディノフ長官と面会。オイスカが取り組む緑化活動への理解を深めた長官からの提案を受け、同国での緑化推進における連携に関するMOUを取り交わしました。日本から参加した会員らも同席し、空気から水を作る技術や、それを活用したアクアポニックスなど、乾燥地で有用な技術が紹介され、長官からも関心が寄せられました。

こうした高い技術を持つ日本の会員企業との連携を模索しているオイスカウズベキスタン総局が、ビジネスマッチングの機会を創出し、日本からは6社7名が参加しました。同国では、経済の多様化や産業の発展に向けて、海外との協力を広げる動きが進んでおり、総局では今後も積極的に会員企業との連携を進めていく予定です。

※昨年、生態・環境保護・気候変動省から大統領直轄の独立機関として改変された。林業庁の正式名称は森林緑化推進および砂漠化対策庁で、同委員会の傘下にある

中央アジアエコエキスポと同時開催された第8回GEF（地球環境ファシリティ）総会の会場で署名式が行われた

国内 マレーシア・サバ州PBPOS

訪日研修生OB・OGら44名が来日 思い出を振り返り、感謝を伝える旅へ

5月25日から6月2日にかけて、マレーシア・サバ州PBPOS（ピーピーポス）（オイスカ研修生OB・OGグループ）のメンバーが来日。オイスカ本部、研修センターなど各地を訪問しました。今回のツアーは、2024年にオイスカ本部および国内4研修センター（愛知、大阪、香川、福岡）のスタッフがOB・OGの調査のため同州を訪れ、PBPOSのメンバーと交流したことをきっかけに企画。その後、同10月に東京で開催されたオイスカ国際理事会に合わせ、PBPOS会長らが国内研修センターなどを視察し、約2年にわたる準備期間を経て、ようやく実現したものです。

本部を訪問。中野総裁（前列中央）を囲んで

参加者には、サバ州から派遣された第1期生を含む訪日研修生OB9名のほか、サバ州の研修センター修了生やその家族も加わり、総勢44名の賑やかなツアーとなりました。

一行は27日、静岡県のオイスカ創立者ゆかりの地を訪れ、28日には東京のオイスカ本部を訪問。オイスカインターナショナルの中野悦子総裁の講話に、熱心に耳を傾けました。また、PBPOSのジョニー・ビン・ギロン会長は、本部スタッフとの交流の場で「私たちは日本や現地センターで、オイスカの研修を受ける機会を得たが、それは自分たちの力だけで得られたものではない。今回はその恩返しとして、日本のオイスカ関連施設や、研修センターを訪問するツアーを実施した」と挨拶しました。

さらに一行は、翌29日から九州に入り、西日本研修センターを訪問。同センターのOBも参加しており、施設の見学やスタッフ、研修生との交流を通じて、当時を懐かしく振り返りました。また、長年にわたりオイスカの委託研修生などを受け入れてきた種苗会社、八江農芸を視察したほか、平和学習の一環として長崎平和公園なども訪れました。

ツアーを終えた参加者からは「今回は、家族も一緒に日本各地を訪れることができ、また皆さまの温かいおもてなしに深く感動した。機会があれば、次は別のメンバーにも呼びかけ、日本を再訪したい。改めて日本とマレーシアの強い絆を実感する機会となった」との感想が届きました。

一行は、各センターに寄附金を贈呈し、研修当時やこれまでの現地での活動支援に対し、感謝の気持ちを示しました。

西日本研修センターへの寄附金を受け取る豊田敏幸所長（中央）。OBにとっては約40年振りのセンター訪問となった

オイスカ便り

全国の支部や支援組織を
ピックアップして紹介します

今回は

三重推進協議会

人と自然、人と人とのつながりを大切に 環境保全・人材育成活動に取り組む

日頃よりオイスカ三重推進協議会の活動に深いご理解とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

三重推進協議会は、平成9（1997）年の再発足以来、人と自然、人と人とのつながりを大切にしながら、これまでフィジー、インドネシア、パプアニューギニア、フィリピン・ネグロス島などで、植林活動や研修生との交流、学校支援に取り組んでまいりました。現地の人々と共に汗を流しながら学び合った経験は、人を育てることの大切さや国際協力の意義を実感する貴重な機会となりました。

中野良子前総裁を囲んで

先日は、オイスカ豊田推進協議会の総会で中野悦子理事長の講演を拝聴し、オイスカの活動が環境保全や国際協力だけでなく、日本の伝統や文化、人を思いやる心を次世代へ伝える大切な取り組みであることを改めて認識しました。

そのお話を伺いながら、かつて三重のメンバーとラバウルを訪れた時のことを思い出しました。戦没者慰霊碑で献花と焼香を行い、般若心経を唱え終えた途端、それまで晴れていた空から雨が降り出し、誰かが「涙雨だ」とつぶやきました。この地に眠る多くの英霊が、私たちを温かく迎えてくださったように感じたことを今でも鮮明に覚えています。

ラバウル訪問。日の丸国旗の歓迎を受けた

近年は会員の高齢化に加え、円安や燃油サーチャージの高騰、世界情勢の変化などにより、海外での活動が難しくなっています。しかし、毎月の役員会では前総裁中野良子著『凛として命』を題材とした勉強会や、楽しくランチをいただきながら意見交換を重ね、学びと交流を深めています。

また、国産材を活用した「森のつみ木広場」や、「海岸林再生プロジェクト」の活動など、地域に根ざした活動にも力を注いでいます。現在の会員数は20名弱ですが、若い世代の参加も見られるようになりました。今後は仲間づくりを進めながら、地域活動の充実とともに、再び海外での植林活動や国際交流事業にも挑戦してまいりたいと考えております。

今後とも皆さまの温かいご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

三重推進協議会　会長
竹尾 博光

支部概要

三重推進協議会は、初代会長、三浦道義氏による三重県支部の活動を礎とし、一時活動休止を経て、平成９（1997）年に再発足。これまで、パプアニューギニアやフィリピンなどでの植林活動や研修生との交流を通じて、国際協力と人材育成に取り組んできました。近年は、国産材を活用した「森のつみ木広場」の実施や「海岸林再生プロジェクト」への参加など、地域に根ざした環境保全、木育活動を推進しています。人と自然、人と人とのつながりを大切にしながら、持続可能な社会づくりと次世代育成に取り組んでいます。

近況 REPORT

地域との連携を深め 知る、体験する、実践する活動を展開

2025年度、オイスカ三重推進協議会では、年間を通じて幹事会を定期開催し、会員相互の交流を深め、情報共有を促進しながら、積極的に活動を進めてまいりました。

5月には、「総会&オイスカ三重のつどい」を開催し、会員のみならず多くの方にご参加いただきました。当日はオイスカ本部から藤井啓介人材育成部長を講師に迎え、「ミャンマー地震緊急報告～被災地に希望を届けたい～」と題した講演を実施。昨年3月にミャンマーで発生した地震の被害状況や、現地で今必要とされている支援、そしてオイスカが取り組む支援活動について理解を深めました。また、ミャンマー出身の中部日本研修センター（以下、センター）の研修生によるお手製のお菓子が振る舞われ、さらに伝統舞踊の披露もあり、研修生や参加者同士の温かな交流の場となりました。

つみ木広場で木の温もりや香りを全身で感じる子どもたち

10月には、宮城県で開催された第48回全国育樹祭に三重推進協議会の吉見明博副会長が参加し、「海岸林再生プロジェクト」の現場も視察。海岸防災林の育成を通じて、災害への備えと自然環境の大切さを改めて学びました。

また、特に力を入れて取り組んだのが「森のつみ木広場」です。津市立朝陽中学校や四日市市の保々こども園で開催し、多くの子どもたちが国産材でできたつみ木に触れながら自由な発想で作品づくりを楽しみました。子どもたちは互いに声をかけ合って大きな作品をつくり上げ、木の温もりや香りを感じながら、創造力や協調性を育んでいました。デジタル化が進む現代だからこそ、木に触れ、人と関わりながら遊ぶ体験の大切さを改めて実感しています。

さらに、12月12日は四日市大学で、学生を対象としたオイスカについての講義を開催。センターでインターンを経験した荒川良寛氏をボランティア講師として迎え、若い世代の共感を生む素晴らしいお話をお聞きしました。

今年度も活動をさらに充実させるとともに、地域社会との連携を深めながら、環境保全や青少年育成、復興支援活動にも積極的に取り組んでいきます。これからも、小さな行動の積み重ねを大切にし、地域に根ざした活動を続けてまいります。

今年度もオイスカ三重の集いを開催しました（2026年5月28日）

おらが 自慢！

四季の美しい景色とおいしい特産物が楽しめる！

三重県を代表するスポットとして挙げられるのは、まずはもちろん皆さんご存じ『お伊勢さん』ですね。

内宮・外宮を中心に、日本の総氏神として古くから信仰を集める伊勢神宮。厳かな森の中で心が整う特別な場所です。

門前町のおかげ横丁では、伊勢うどんや赤福など名物グルメも楽しめます。

また、工業都市として発展してきた四日市市は、現在では夜景スポットとしても人気で、四日市コンビナートの幻想的な風景が多くの人を魅了しています。

さらに、地元グルメの“とんてき”も外せません。

自然豊かな菰野町は、鈴鹿山脈のふもとに広がり、御在所岳や湯の山温泉など四季折々の風景が楽しめます。登山や温泉で心身を癒せる、静かな魅力あふれる地域です。これら三つの地域は、それぞれ異なる個性で三重の魅力を彩っています。

“とんてき”は、厚切りの豚肉をニンニクと濃厚ソースでソテーした四日市市の名物料理です！

三重推進協議会事務長　中西幸照

センターの研修には、
日本語や日本文化を学ぶ
短期研修の受け入れも
あります！

日研修生・
生

各国の農村開発や環境保全活動に
の受け入れが始まったのは1963年。
の農家や企業に技術指導を委託する
ターで行うオイスカ独自の
青年が日本での研修を
年を超える研修事業の
藤井啓介が
ます。

研修生OBの中には、
帰国後に母国で政府の
大臣に就いた人も
複数名います

研修に含みます

1 受け入れ人数

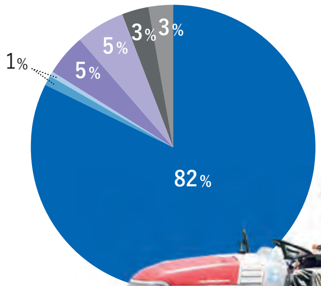
延べ5,607人！

（研修生数：3,505 人／技能実習生数：2,102 人）

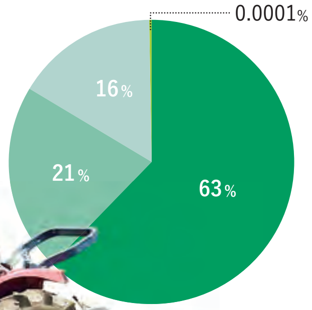
約63年間で、5,600人を超える海外の青年が日本での研修を修了しました。性別の内訳は男性8割、女性2割。研修内容は円グラフの通り、センターで行う研修では、農業分野が8割を占めます。ほかにも女性向けに家政や生活改善コースなども受け入れてきました。

一方で技能実習と委託研修も農業（6割）や製造業（2割）が主流ですが、近年の技能実習生増加に伴い、自動車整備や介護といったサービス業の受け入れも拡大。時代や社会のニーズに合わせ、多様な分野での国際人材育成に取り組んでいます。

センター研修のコース別人数の割合



技能実習・委託研修の
業種別人数の割合



3 平均年齢

25.8歳！

全研修生、技能実習生のうち、生年月日の記録がある5,453名の入国時の平均年齢は25.8歳で、改めてオイスカの研修が青年を対象とした研修であることがわかります。そのうち、最年少は1968年のインドからの15歳、最年長は1982年と89年の台湾（短期研修）からの63歳でした。さらに研修生のみの平均は27歳、技能実習生は24歳。男女別では、男性26歳、女性25歳でした。

受け入れ国・地域のうち
日本から最も
距離が遠い国は、
南米のウルグアイ！

2 受け入れ国・地域の数

58！

研修生の受け入れは1963年、フィリピン（機械）とガーナ（繊維技術）からの受け入れに始まりました。その後63年間で58の国と地域から研修生を受け入れましたが、約9割はアジア圏。そのうち、研修生数と技能実習・委託研修生数の割合は3：2でセンターでの受け入れが多く、男女比は4：1でした。続いて、南太平洋諸国を含むオセアニア圏が多く、アジア圏と合わせると受け入れ人数の割合が98%と、ほとんどを占めます。

地域別受け入れ人数

	アフリカ圏	アメリカ圏	アジア圏	ヨーロッパ圏	オセアニア圏
男性	28	21	4,129	2	324
女性	12	22	998	1	70

（人）

TOPIC

＼数字で見る！／

オイスカ訪
技能実習

オイスカは創立以来、人材育成を基盤に、
これまで取り組んできました。訪日研修生
現在の技能実習制度にも通じる、外部
「委託研修」に始まり、70年代からはセン
農業研修がスタート。現在、多くの農村
修了し、母国で活躍しています。この60
数値データをもとに、人材育成部長の
オイスカの訪日研修のあゆみを振り返り

※データ、グラフ、表は全て1963～2026年4月のデータを参照
※技能実習生数には委託研修生を含みます
※技能実習制度移行前の農業分野の委託研修生は、センター

受け入れ初期には
船で海を渡り、
数カ月かけて来日した
研修生も！

5 受け入れ人数が一番多い年

1991年！

1991年に受け入れた人数は225人。そのうち140人が委託研修でした。当時は、センターでのJICA受託の農業研修に加え、全国の受け入れ企業で、農業や製造、サービスなど幅広い分野で委託による技術研修が行われ、日本企業と各国送り出し機関との交流も活発だったことがうかがえます。なお、研修生のみでは1988年の113人が最多で、バブル崩壊前の好景気も背景の一つと考えられます。また、技能実習生は、1991年に並び2022年も140人で最多となっており、近年の技能実習生受け入れの増加傾向を反映しています。

1963年以降、受け入れ
人数が一番少なかった年は、
新型コロナ感染拡大による
渡航制限が行われた
2021年（1名）でした

委託研修では、日本の最先端技術だけでなく、職場の改善・効率化のための5S（整理・整頓・清掃・清潔・しつけ）やチームワークなども学んだ（写真は1980年頃）

6 研修生・技能実習生数が一番多い国

フィリピン1,545人！

研修生、技能実習生・委託研修生ともに、最多はフィリピンでした。同国は、日本からの技術員派遣数と現地研修センター数も最多で、フィリピン各地のセンターで育成した人材を日本へ派遣する体制が整っていたことから、長年にわたり多くの訪日研修生を派遣できたといえます。次に多いマレーシアは、技能実習生・委託研修生の数がフィリピンとほぼ同規模です。その背景には、1967年にマレーシア政府・地域開発省傘下で人材育成を担うマラ公団とオイスカとの連携が始まり、同公団を通じて工業分野を中心に多くのマレーシア青年を受け入れてきた歴史があります。

4 2回以上来日した人数

342人！

最多は4回（5名）で、いずれもフィリピン出身者でした。1回目はセンターの農業研修に参加し、2回目以降は農業指導や、外部の委託研修生として来日するといったケースです。最近は、センターの研修に参加した後、技能実習生として来日する例も増加傾向にあります。

レタスの出荷作業、
がんばります！

基礎研修を終えて、
修了証を手に！

今月のこの人

松岡　篤彦(42)

中部日本研修センター　研修第二課（技能実習）

技能実習生にはもっと日本を楽しんで、
頑張るための心の根をしっかり張ってほしい

現在、中部日本研修センターで、技能実習生が会社に配属される前に日本語や日本での生活を学ぶ2ヵ月間の基礎研修などを担当する松岡さん。もともと高校の教員を務めていた経験から、実習生には、スタッフを信頼してもっと利用し、そして〝校則違反〟にならない範囲で自発的に活動してほしいと、彼らの成長を日々見守っています。

――高校の先生がどうしてオイスカに？

教員を辞めた後、どうしようと思っていた時に相談をしたのが、オイスカの会員さんだったんです。というのも、以前から両親がご近所付き合いをしていたあるご夫婦がいて、互いの家に出入りするほど仲が良かったんです。私も頻繁にお会いしていた中で、そのご主人に今後の話をしたら「面白いところがあるよ」とオイスカを教えられました。それで、さっそく県内にある中部日本研修センターを訪ねてみると、これ確かに面白かった。これまで自分の周りに、これほど国際色豊かなところがなかったし、野菜と卵が今までで一番ぐらい美味しかった。しかも、当時食堂を担当していたのはフィリピン人スタッフで、どんな料理が出てくるんだろうと思っていたら、美味しいひじきの煮ものが出てきて、不思議なところだなぁと感じました。

面接時には、技能実習生の日本語や生活指導などの研修をやってほしいという話があり、前職の経験もありますので、これだったらお邪魔にはならないかなと入職を決めました。でも決め手は、小杉裕一郎所長の「松岡くん、ここはね、やりがいだけはあるよ」の一言。正直な方だなと(笑)。2023年にセンターのスタッフになり、もう4年目ですが、良くも悪くも偽りのない言葉だったなと思います。

スタッフも姿勢を正して朝礼に臨んでいます！

――日本語の指導では特に教員の経験が活きますね

コツはなんとなく身に付けているので授業を成立させること自体はできるのですが、一方で質を高めることに難しさを感じています。日本人なら、日本語で深い話もできますが、実習生には簡単な言葉で、伝わるように話すことが大切になるため、教科書の基礎に絡めて応用の知識を教えたり、根本から理解できるように内容を補填したりすることに苦心しています。教員時代の師匠に、「授業は落語だと思いなさい」と言われたことがあります。「枕があって、内容があって、最後にオチがある。今日の話はこういうことなんだってちゃんと頭に残るように、一つの物語として良いものをつくりなさい」と。そのストーリー立てにいつも頭を悩ませています。

でも実習生たちは、授業外でも自分で努力してどんどん上達していきますね。男の子も女の子もある程度人数がいると、彼ら自身で予定を立ててスポーツをしたり、休みの日に外出したりしています。そういう時、皆で仲良くしようとすると、共通語が日本語しかないので日本語も上手くなるんです。特に女の子がいると男の子は頑張りますね。そうして良

技能実習生もセンターのイベントに積極的に参加。地域の人々との交流を通じて、日本語への親しみも深まる。（写真はGGRのチャリティバザー／5月8日）

いクラスができていくんです。

教員はよく教え導くといいますが、そうではなく、彼らが自分たちで考えて行動して、悪い方向に行かないように見守る。研修でも、それが理想だと考えてます。

――どんな時に一番「やりがい」を感じますか？

一番は「宴会」です(笑)。センターでは花見など季節ごとに親睦会を開催していて、その時に音楽をかけて皆で歌ったりするんです。いろいろな国の人が一緒に楽しく過ごしているのを見ていると、なんだか小さな世界平和がある気がして、いい光景だなあと思います。日頃の取り組みが、国境を越えた良い関係をつくっていると思うと、やっていて良かったと感じます。

実習生は、家族への仕送りに意識が向きがちですが、頑張り続けるためにも、もっと日本を楽しんでもらいたいです。日本語を勉強して、友だちをつくって、どこかに遊びに行ったり、日本での生活を楽しめたら、自分のやりたいことや目標に向けて、さらに心の根っこがしっかりしていくんじゃないかなと思います。

松岡　篤彦（まつおか　あつひこ）
日本福祉大学情報学科を卒業後、高校で情報科目の教員を務める。将来の生き方に迷っていたところ、知り合いの紹介でオイスカを知り、２０２３年入職。現在、研修第二課（技能実習）を担当。

とある日の

松岡さんの1日

06:45 ラジオ体操・掃除

センターの朝は、ラジオ体操ですっきりと体を起こし、掃除をすることから始まります。研修生、技能実習生、スタッフ皆で取り組みます！

08:00 点呼

研修生と実習生合同で点呼と国旗掲揚を行います。

本日もいい天気
元気に敬礼！

08:30 ホームルーム

研修生、技能実習生と一緒に、一日のスケジュールを確認。この時間に日本の文化やルールを教えることも。

09:00 日本語指導

日本語の指導を通して、実習生とコミュニケーションを取ります。センターでの２ヵ月でどのような関係性を築けるかが、実習先への配属後の指導にも大きく関わります。

コミュニケーションが大切です

12:00 昼食

実習生が積極的に日本語で話せるよう、なるべく国が偏らないように席に着き、皆で一緒に昼食を食べます。

14:00 会社訪問

実習生の配属先の会社を訪問。必要書類の受け渡し、実習生に関する相談など、意外とやることがたくさんあります。

19:00 巡回指導

実習生の仕事が終わったあと、宿舎での生活指導を兼ねて面談を行います。

会員さんからひとこと

日本語
ボランティア
加藤　喜昭さん

松岡さんは、センターの男性陣の中で、40歳越えにして最ヤングという立場です。その上、オイスカに籍を置いてから日が浅い。しかしフットワークが軽く、技能実習生や訪問者を空港へ送迎したり、実習生の勤務先へ出かける時などは、颯爽とハンドルを握ります。時には、県外へ出かける時もあります。長時間の運転も気にしないタフな体力の持ち主です。掛かってきた電話には、間髪を容れず受話器に手が伸びます。デスクワークでも顔をしかめながら、パソコンに向かっています。ハードにも強いのです。前職は教員でしたので、日本語指導や現場学習の引率で、指導の目標や見学の狙いを分かりやすく研修生に説明しているのには、さすがだなあと思わせられます。

時に私は、愛知県支部職員の村松明さんを交え、３人でお酒を酌み交わします。ある時、松岡さんはこんなことを語りました。「オイスカ活動の現場を体験したい」彼は、海外駐在員になって夢を叶えたいと考えているようです。私も、その日が来るのを楽しみにしています。

OISCA SQUARE

歴史さんぽ ―オイスカ―

Vol.19

タイ・チェンライ県チェンコン郡ホイエン村
元日本兵の恩返しからつながる森づくり

写真から伝わるさまざまな思いにフォーカス！

木陰の全くないはげ山への植林。子どもたちも一緒に一本一本丁寧に苗木を植えた。右奥に見えるのはラオス

木々が大きく生長して緑に視界が遮られ、上（植林時）の写真と同じ構図では撮影できなくなった

タケノコやキノコ、はちみつなどが採れる豊かな森になりました！

　ラオスとの国境、メコン川沿いに広がる森はかつて、水源地であるにもかかわらず木々が不法伐採され、単一作物栽培や焼畑により一面のはげ山でした。オイスカが、ここにもう一度緑を取り戻そうと活動を始めたのは約30年前。きっかけは、第二次世界大戦中に遡ります。命からがら逃れた日本軍兵士が、この地で村人に優しく迎えられ、食べ物を分けてもらい、助けられたというのです。そのお礼の気持ちから、元日本軍兵士の方々がオイスカを通じて森づくりをスタートしたのです。
　しかしながら当初の活動では、山林火災や、森づくりの技術や資金不足もあり、計画の全てを成功させることはできませんでした。そして時が経ち、先の戦争から続く多くの方々の思いをつなぐため、2010年頃に活動を再開。日本から多くの企業や団体、個人の支援が集まる中、培ってきた森づくりの経験を活かして、地域の方々と地道な努力を重ねてきました。その結果、今では豊かな森と、その森を大切にしながら共に生きるコミュニティを育てることができました。戦時中の村人の優しい思いやりが、長い年月を経て、現在の住民の生活を支える森づくりにつながり、地域に愛されるかけがえのない存在となっています。

OISCA
レストラン

右からスエ、ニーニートウン、ピュー

ミャンマーのお茶の葉サラダ
ラペットゥ

ラペットゥは、発酵させた茶葉をさまざまな具材と混ぜ合わせてつくるミャンマーの伝統料理です。「ラペッ」がお茶の葉、「トゥ」は和え物やサラダを意味します。日本では、お茶にしたり、粉末にしてお菓子などの加工品に用いることが多い茶葉ですが、ミャンマーでは発酵させて料理に使うのが一般的で、ラペットゥはその代表的な食べ方です。祝祭や来客時のおもてなしの料理としてもよく登場し、年配の世代では揚げた豆、ゴマ油、発酵茶葉などの具材を混ぜずに盛りつけるシンプルな食べ方が好まれます。

一方で若い世代では、基本の材料に加え、ニンニク、ゴマ、キャベツ、トマトを混ぜてアレンジすることも多いです。味付けや具材は家庭によっても違い、好みに合わせて自由につくることができます。酸味や苦味、塩気もあり、最初は少し意外な味に感じるかもしれませんが、食べるほどにクセになる味です。

日本で買える材料でも手軽につくれるので、皆さんもぜひお試しください！

（株式会社やさしい手技能実習生／ピュー）

BOOK

お！ススメ
OISCA

国内外のオイスカスタッフから、さまざまなジャンルの「オススメ」を紹介します！

読んだら旅に出たくなる！　深夜特急

沢木耕太郎『深夜特急1 ―香港・マカオ―』（新潮文庫刊）

大学生時代に研究室の先生に勧められて知った本です。熱中して読み、気づけば東南アジアを陸路で回る旅に出ていました。シンガポールに始まり、マレーシア、タイ、ラオス、ベトナム、香港を約１ヵ月かけてひとりで回りました。バックパックの旅は刺激的で楽しい反面、疲れ果ててしまうこともありますが、今度はユーラシア大陸を横断したいと思っています。読めばきっと誰もが旅に出たくなるはずです。　（本部E.H）

クレジットカード決済代行会社移行のお知らせ

いつも温かいご支援を誠にありがとうございます。

これまでクレジットカードでのご寄附につきまして、決済代行会社の「SMBC GMO PAYMENT株式会社」を通じてお預かりしていましたが、この度利便性とセキュリティーの観点により、クレジットカードからのご寄附の引き落しを現行の決済会社から「コングラント株式会社」に変更いたしましたので、お知らせいたします。

カード決済でのご支援継続をご希望の会員（マンスリーサポーター含む）の皆さまは、次のQRコードからご登録をお願いいたします。また新規でカード決済での支援をご希望の方も登録いただけます。

※「子供の森」計画の継続支援者の皆さまには、順次郵送で登録に関するお知らせをお送りしております。お手元に届きましたらご覧の上、お手続きをお願いいたします。

会員

マンスリーサポーター

オイスカHP「個人の皆さま」の画面からもお手続きいただけます

コングラントお申込み画面

〈クレジットカード決済に関するお問い合わせ〉

公益財団法人オイスカ　総務部
TEL : 03-3322-5161
E-mail : kaiin@oisca.org

関西支部移転のお知らせ

7月より、関西支部事務所をオイスカ関西研修センター内へ移転することになりました。

■新住所
〒563-0101
大阪府豊能郡豊能町吉川1-20
オイスカ関西研修センター内

研修センター日記

Vol.6 中部日本研修センター

自然との関わりを学ぶ農業研修

中部日本研修センターの研修期間は、農業、家政コースともに2年間です。農業コースでは毎年4名が入所し、2年目の研修生を含め、計8名が在籍しています。1年目で基礎を学び、2年目は学んだことを後輩に教えるというスタイルです。畑では身近なものでつくった有機肥料を使用し、養鶏では分けてもらったスーパーの野菜くずや、豆腐屋のオカラを配合飼料に混ぜています。有機農業は一般の栽培より難しいですが、農業を通じて自然との関わりを学ぶことを大切にしています。5月下旬の今、研修生たちは田植えや夏野菜の定植を終え、農業機械の操作や、初めてのビニールハウスでの野菜栽培も体験しています。自国とは違う環境や方法での農業は、研修生にとって難しくもあり、興味深くもあるようです。(筑田)

帰国後は
バングラデシュセンターで
全力を尽くします！

ラキブ（バングラデシュ）

ご支援ありがとうございます！

新会員の紹介

新しく会員になられた方は次の通り。（２０２６年４月１日～４月30日までの間、本部登録済分。順不同、敬称略）

■特別法人
【京都府】株式会社健康ファーム

■維持法人
【東京都】ドレミングジャパン株式会社／株式会社ハーミットクラブデザイン【山梨県】ティーエーシー武田消毒株式会社【富山県】三菱ケミカル株式会社富山事業所【愛知県】株式会社マネジメントサポート

■維持個人
【宮城県】佐藤幸恵【東京都】大川内隆朗／七田幸彌【静岡県】佐地茂人／菱沼学【富山県】橋本匡史／古井康介後援会／森沢恵美子／久郷慎治【香川県】岩瀬典子／豊嶋稔／國方亮【徳島県】原田和典【高知県】山崎勝彦【福岡県】平井正則【大分県】古庄重生

寄附

２０２６年３月１日～４月30日までにいただいた寄附は次の通り。（順不同、敬称略）

●新倉和歌子（東京都）／東ティモール研修生受け入れに３００万円
●エプソン販売株式会社／海外開発協力事業に２００万円
●株式会社クラフティア／人材育成事業に１２１万１５００円
●インフロニア・ホールディングス株式会社および前田建設工業株式会社／「子供の森」計画に１５０万円
●ＣＯＳＭＯエコ基金／海外開発協力事業に１１５万８５４５円
●三菱自動車工業株式会社／「子供の森」計画と「パジェロの森活動」に合わせて１０５万３００８円
●三菱自動車ＳＴＥＰ募金／「子供の森」計画に22万円
●デリシャス株式会社／「子供の森」計画に１００万円
●ロジスティード株式会社／「子供の森」計画に１００万円
●ＫＤＤＩ株式会社「キボウのカケハシ」／富士山の森づくりに82万８８９２円
●一般社団法人北海道ＣＧＣみどりとこころの基金／啓発普及事業に90万円
●オイスカ国際活動促進福岡県議会議員連盟／人材育成事業に60万円
●株式会社関電工／富士山の森づくりに50万円
●住友重機械工業株式会社／富士山の森づくりに50万円
●鈴健興業株式会社／富士山の森づくりに50万円
●オイスカチャリティゴルフ実行委員会（福岡県）／人材育成事業に43万２３６４円
●丸眞株式会社／「子供の森」計画に41万７４６５円
●株式会社長門屋商店／「子供の森」計画に40万８０６７円
●株式会社静岡銀行／啓発普及事業に36万９４４２円
●ＳＵＭＩＮＯＥ株式会社／「子供の森」計画と海外開発協力事業に合わせて30万円
●オイスカチャリティゴルフコンペ実行委員会（香川県）／啓発普及事業に30万円
●一般社団法人ＭＤＲＴ日本会／海岸林再生プロジェクトに30万円
●東芝労働組合府中支部／「子供の森」計画に30万円
●株式会社ジェイアール西日本マルニックス／「子供の森」計画に23万７８００円
●仙台トヨペット株式会社／海岸林再生プロジェクトに23万３０２０円
●株式会社フレックスインターナショナル／「子供の森」計画に20万円
●ハートネット／海外開発協力事業に20万円
●株式会社ヤクルト本社／「子供の森」計画に16万１６７０円
●株式会社ベストワン／「子供の森」計画に12万６５０８円
●株式会社宇治川商店／人材育成事業に11万２０００円
●ａｕエネルギー＆ライフ株式会社／啓発普及事業と「子供の森」計画に合わせて10万１５００円
●あすてボランティア／人材育成事業に10万円
●株式会社オーレック／「子供の森」計画に10万円
●株式会社健康ファーム／海外開発協力事業に10万円
●石井淑雄（香川県）／人材育成事業に10万円

〈お詫び〉
本誌２０２６年５月号「今月のこの人」（11ページ）、先生からひとこと内のお名前の表記に誤りがありました。正しいお名前は以下の通りです。

誤　岡本さん
正　岡村さん

ご本人さま、関係者の皆さまにご迷惑をおかけしましたこと、深くお詫び申し上げます。

次号予告

OISCA
SEPTEMBER 2026 9

《特集》
2025年度 年次報告

OISCA 7月号
発行人／中野悦子
発行所／公益財団法人オイスカ
〒168-0063 東京都杉並区和泉2丁目17番5号
TEL（03）3322-5161　FAX（03）3324-7111
E-mail oisca@oisca.org
編集：OISCA ／渕上保一　倉本有沙
アートディレクション／土肥幹人
デザイン／土肥幹人　坂巻貴行
印刷・製本／株式会社ケープリント

本誌掲載の記事・写真・イラストなどの無断転載を禁じます。

アタリ
責任ある木質資源を使用した紙
FSC FSC™ C016564

今月の表紙写真

Photo by Sundar Shyam

キュウリの健全な生長のため、ネットを張り、テープナーで誘引をする研修生。全ての作業に意味があり、生育に影響していることを学びます。写真は、インドの研修生シャムが撮影しました。（中部日本研修センター）

人と育む、地球といきる

理念 ▶▶▶

Vision
実現したい未来

人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、自然と調和して生きる世界

Mission
日々果たすべき使命・存在意義

私たちは、すべてのいのちが健やかに守られるよう、感謝の心を持つ「人」を育み、いのちの土台となる森づくりや、共に助け合う社会づくりに取り組みます

Value
私たちが大切にしていること

- 互いを理解し尊重
- 土から離れない
- 感謝の心を持ち、へこたれない「人」を育む
- 地域に根差し、住民の「良くしたい」を尊重

Spirit
Visionを達成するために、
私たち一人ひとりが
日々実践する心のあり方

- 先を展望する想像力を持つ
- 着実に一歩ずつ積み重ねる
- 仲間とともにチーム力を発揮する
- 挑戦し続ける
- 経験から学び進化する
- 感謝の心を持つ
- 真摯である
- へこたれない
- 人間味にあふれ、楽しみながら！

公益財団法人オイスカ

オイスカは、会員･支援者の皆さまからの会費や寄附金によって運営されています。「公益法人」としての認定を受けているため、所得税･法人税･相続税、また、条例で定められた自治体では住民税も控除対象となります。受領書をお届けしますので、申告の際にご利用ください。

●特別会員（年額1口）	法人／10万円	個人／5万円
●維持会員（年額1口）	法人／ 4万円	個人／2万円
●マンスリーサポーター	個人／月々 2,000円~	

※特別会員と維持会員には、会員としての差異はなく、口数とともに、自由にお選びください。
※会員、マンスリーサポーターの皆さまには、広報誌「OISCA」をお届けします。
※新入会年度は、入会月によって納入金額が異なります。

●「子供の森」計画支援金（年額1口）　個人･法人／5,000円

※海外の支援地域の活動案内（年1回）やニュースレター（年2回）をお届けします。
※子どもたちからのグリーティングカード（年1回）が届きます。

ウェブからも支援のお申し込みができます ▶ https://oisca.org/

お問い合わせや資料請求のお申し込みは

公益財団法人
オイスカ
〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5
TEL (03) 3322-5161　FAX (03) 3324-7111
E-mail oisca@oisca.org
https://oisca.org/

国内研修センター

中部日本研修センター　〒470-0328 愛知県豊田市勘八町勘八27-56 TEL 0565-42-1101 FAX 0565-42-1103
関西研修センター　〒563-0101 大阪府豊能郡豊能町吉川120 TEL 072-738-3699 FAX 072-738-3901
四国研修センター　〒761-2103 香川県綾歌郡綾川町陶5179-1 TEL 087-876-3333 FAX 087-876-3334
西日本研修センター　〒811-1112 福岡県福岡市早良区小笠木678-1 TEL 092-803-0311 FAX 092-803-0322

国内支部

北海道支部　〒062-0931 札幌市豊平区平岸1条1丁目8-8 ラルズ生活研究センター1F TEL 011-867-9684 FAX 011-867-9685
宮城県支部　〒980-0014 仙台市青葉区本町2-10-28 カメイ仙台グリーンシティビル6F TEL 022-265-3350 FAX 022-281-9077
首都圏支部　〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5（公財）オイスカ内 TEL 03-3322-5161 FAX 03-3324-7111
山梨県支部　〒400-0016 甲府市武田1-2-5 3F TEL 055-267-5951 FAX 055-267-5951
長野県支部　〒380-0838 長野市県町584 長野県経営者協会総務部内 TEL 070-5550-7394
富山県支部　〒939-2226 富山市下タ林280-3 TEL 076-468-7120 FAX 076-468-7128
静岡県支部　〒431-1115 浜松市中央区和地町5815 TEL 053-401-3980 FAX 053-401-3981
愛知県支部　〒470-0328 豊田市勘八町勘八27-56 オイスカ中部日本研修センター内 TEL 0565-42-1162 FAX 0565-42-1103
岐阜県支部　〒503-8603 大垣市久徳町100番地 太平洋工業㈱本社内 TEL 0584-47-9420 FAX 0584-47-9419
関 西 支 部　〒563-0101 大阪府豊能郡豊能町吉川120 オイスカ関西研修センター内 TEL 070-5550-7394
広島県支部　〒730-0041 広島市中区小町4-33 ㈱エネルギアL＆Bパートナーズ内 TEL 082-242-7804 FAX 082-242-4706
四 国 支 部　〒761-2103 香川県綾歌郡綾川町陶5179-1 オイスカ四国研修センター内 TEL 087-876-3333 FAX 087-876-3334
西日本支部　〒811-1112 福岡市早良区小笠木678-1 オイスカ西日本研修センター内 TEL 092-803-0311 FAX 092-803-0322

OISCA NETWORK

福　島　〒963-0534 郡山市日和田町字大窪50-8 ㈲根本産業内 TEL 024-958-2643 FAX 024-958-3741
茨　城　〒311-0113 那珂市中台852-9 TEL 029-298-2539 FAX 029-298-2539
神奈川　〒231-0021 横浜市中区日本大通り33 神奈川県住宅供給公社ビル1F TEL 03-3322-5161
三　重　〒510-0958 四日市市小古曽1-1-7 中村建設㈱内 TEL 059-345-1101 FAX 059-345-0745
徳　島　〒770-8555 徳島市寺島本町東2-29 四国電力㈱徳島支店総務課内 TEL 088-656-4593 FAX 088-656-4511
愛　媛　〒790-0924 松山市南久米町乙24-84 TEL 070-8524-0349 FAX 089-948-8682
高　知　〒780-0870 高知市本町1-6-24 高知商工会議所総務企画部内 TEL 088-875-1177 FAX 088-873-0572
佐　賀　〒840-0826 佐賀市白山2-1-12-4F TEL 0952-28-1368 FAX 0952-28-1368
長　崎　〒858-0908 佐世保市光町109 ㈱堀内組内 TEL 0956-47-2127 FAX 0956-48-5069
熊　本　〒865-0055 玉名市大浜町2173-1 丸光グループ本社内 TEL 0968-76-2161 FAX 0968-76-2162
大　分　〒870-0001 大分市生石港町2-12-14 ㈲大地企画内 TEL 097-533-2101 FAX 097-533-5040
宮　崎　〒880-0879 宮崎市宮崎駅東2-4-9 TEL 0985-26-5673 FAX 0985-26-5673
鹿児島　〒892-0817 鹿児島市小川町15-1 ㈱南日本総合サービス内 TEL 099-224-3833
沖　縄　〒902-0077 那覇市長田2-12-9 セレクション長田101 TEL 098-943-2871 FAX 098-943-2881

■令和8年7月1日印刷 ■令和8年7月5日発行 ■オイスカ ■通巻723号